

事例に学ぶ 授業改善に向けた
チームづくりとそのステップ

内容

はじめに	5
1. 文部省学校評価ガイドラインと授業アンケート	8
(1) 学校評価ガイドラインの概要	8
(2) 授業アンケートをどのように位置づければよいか	10
2. 授業満足度を高めるために教科主任がとるべきステップ	13
教科主任着任以前	14
教科主任1年目	16
教科主任2年目	22

教科主任のリーダーシップとは	24
3. 授業満足度が向上した教員の取り組み	27
英語	28
地歴公民	34
4. まとめ 授業カンファレンスをはじめましょう	38
プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ(PLC)	38
授業カンファレンス	39
ケーススタディ 聖望学園における学校改革	44
変革の歴史	44
進学路線の強調	47

授業改善	59
数学科の取組み	65
学校評価	81

はじめに

平成19年度より「全国学力・学習状況調査」が実施されました。これは、教育活動の成果を量的な調査により客観的に把握しようとする動きであるといえます。こうした動きのメリットとデメリットについて考えてみます。

メリットは、教育の目標や活動を客観的に測定できる表現で語ることができることです。したがって、保護者や、その学校を受験対象として考える人たちは学校の様子を数字から知ることができます。さらにいえば、同じ領域について比較することができます。もう一つのメリットは、先生にとっては教育活動を検証するための指標ができることです。一定期間行った教育方法がどのような影響を生徒に及ぼしたのかを検証し、次の教育活動について考えることができます。また、学校組織でみると、数字による表現を共有し問題を焦点化することで、議論のブレが少なくなると考えられます。

一方で、数字はひとり歩きしやすいというデメリットもあります。数字は、それ自身では意味を持ちません。見る人の価値観や体験にその意味をゆだねます。何の説明もなく数字を示された場合、多くの人は、数字を「1, 2, 3」と数えたり、「80は60よりも大きい」という解釈をします。しかし、その数字の背景にある文脈を理解しておかないと誤った解釈にいたることがあります。例えば、授業満足度80%のクラスがあるとします。しかし、実際は5人のうち4人が満足と答え、授業満足度60%のクラスは30人中18人が満足と答えていたとすれば、実際に満足させた人数は後のクラスの方が多いこととなります。もしかすると一方のクラスではアンケートを実施する直前にクラス内で何か問題があり、それが回答に影響したかもしれません。学年やコース、教科の違いも影響するでしょう。

もう一つのデメリットとして、情報が絞られる、ということがあります。たとえば、アンケートを取ると言うことは、そのアンケートの項目にのらない情報については把握しない、ということになります。すると、そこにアンケート設計者の価値観のフィルタ

ーがかります。このように、数字で語られることが教育活動やその成果のすべてではないということをよく理解しておく必要があります。

これら以外にもメリットやデメリットはあるかと思いますが、教育を数字で語るといふ動きは今後もしばらくはなくなることはないでしょう。学校を取り巻く環境がこのように変化している以上、私たちもうまく数字を扱えるようになる必要があるかと思えます。今回の「授業評価の科学③」では、そんな「数字をうまく活用するためにどうすればいいか」という問いに答えようと思いました。その答えが、「授業改善に向けたチームづくり」です。授業アンケートの結果として示される数字は、それが授業改善に向けたチームづくりに使われてこそ意味を持つと考えました。

本書の構成は次の通りです。まず、今日求められている教育活動の評価についてみるために、文科省の「学校評価ガイドライン」を下敷きに、授業アンケートをどのように位置づければよいかを見ます。2章では、国語科全体の授業満足度を大きく向上させた広島国際学院高等学校の事例をもとに、教科全体の授業満足度を高めるために教科会主任としてどのようなことに取り組めば良いのかを見ていきます。3章では、成立学園高

等学校の事例から、英語科と地歴社会で授業改善を実現した先生たちの取り組みを紹介します。まとめとして、授業力を高めるための授業カンファレンスの取り組みかたについて紹介いたします。また、ケーススタディとして学校評価及び授業アンケートに取り組みされている聖望学園中学高等学校の講演録を掲載いたしました。

1. 文科省学校評価ガイドラインと授業アンケート

(1) 学校評価ガイドラインの概要

すでにご承知のとおり、平成20年1月31日付の文科省の「学校評価ガイドライン」によりますと、学校評価の目的として次の3つが述べられています。

① 各学校が、自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取り組みの適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図る。

② 各学校が、自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携及び協力による学校づくりを進める。

③ 各学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講じることにより、一定水準の教育の質を保障し、その向上を図る。

つまり、「①活動の検証」「②情報の開示」「③改善の促進」が評価の目的であると言えます。では、授業アンケートは学校評価ガイドラインにどのように位置づけられるのでしょうか。

（２）授業アンケートをどのように位置づければよいか

文科省の学校評価ガイドラインでは、次のような手順が示されています。

- ① まず各学校の教職員で「自己評価」を行う。
- ② 次にその自己評価結果を評価する「学校関係者評価」を行う。
- ③ 最後に学校に直接関与しない専門家による「第三者評価」を行う。

授業アンケートは「①自己評価」を行うための情報収集の手段として位置づけることができます。「②学校関係者評価」や「③第三者評価」では、授業アンケート結果だけでなく、アンケート実施後の目標や活動プランについても示す必要があるでしょう。具体的には次のことを意識する必要があります。

- ① 年度計画（シラバス）や授業計画を立て授業を行う。
- ② 授業アンケートを通じて計画通りに進んでいるか、適切な授業が実現できているかを確認する。生徒の潜在的なニーズをくみ取る。
- ③ 修正が必要な個所について教科／個人のそれぞれのレベルで改善する。
- ④ ①～③の授業改善サイクルを定着させる。

また、次のことも必要となります。

⑤ 授業アンケートの結果、その解釈、及び今後の授業改善計画について保護者などに説明する。

⑥ 校長は授業改善計画実現のために必要な予算や人を投入する。

このように考えますと、授業アンケートを学校自己評価に活かすためには、アンケートを実施するだけでなく、それをどのように改善に結び付けていくか、という視点や手続きが求められていることが分かります。

次に、授業アンケートをうまく活用されている学校の事例についてみていきましょう。

2. 授業満足度を高めるために教科主任がとるべきステップ

広島国際学院高等学校は、広島駅から10分ほど電車にのった場所にあります。全校生徒約1200人、創立80年を数える工業系の総合システム科を有する学校です。近年、国公立大学合格者が増えています（平成12年度10人↓平成17年度26人）。

ここでは国語科の授業満足度がどのようにして高まったのかに着目したいと思います。国語科では、平成16年前期から平成18年前期の2年間で教科全体の授業満足度が大きく上昇しました（※）。そこで、どのような取組をしたかを教科主任（当時）の那須泰先生に伺いました。

※意欲、関心、関心喚起、予習、復習、学力向上実感、わかりやすさ、教員の好感度の8つの指数を合計した値で比較した結果。指数は、4つの選択肢のうち肯定的な回答をした生徒の割合から否

定期的な回答をした生徒の割合を引いて求めます。一つの指数につきマイナス100ポイントからプラス100ポイントまでの幅があります。指数が8つありますので、最小値はマイナス800ポイント、最大値は800ポイントとなります。平成16年度前期には授業満足度の合計値がマイナス142ポイントでしたが、平成18年度前期には113ポイントと、255ポイントアップを実現されました。

(1) 教科主任着任以前

授業アンケートが導入される以前の国語科は、「組織的ではなく各自のスタイルで自由に指導」する教科だったとおっしゃいます。教科会議などは事務的内容の伝達のみ、教材は渡されるだけで、特に授業の進め方などの打ち合わせはなく、教材選定なども前年度を踏襲するスタイルだったようです。このときまだ教科主任でなかった那須先生が取り組んだことは次のようなことでした。

- ・ 同一の学年、科目、単位数の場合は、テストを共通にし、評価基準をそろえる働きかけ
- ・ 自分が中心となつて行えそうな場合は、定期的な話し合いを実施
- ・ 受験指導体制の構築
- ・ 漢字テストの開始
- ・ 教科書だけでなく、問題演習も取り入れた授業

こうした動きに、他の先生も生徒も少しずつ変化してきているという感触があったようです。当時の国語科が抱えていた課題や問題点について、那須先生は次のように振り返っています。

- ・ 教科会の組織的取り組みが弱い（教科会議がほとんど実施されないなど）
- ・ シラバスを作り始めたが、教科としてのビジョンが不明確（どのような生徒を育てるかと言う目的が共有されないまま日々のルーティーンをこなすだけ）
- ・ 国語科の叡智をかけた入試問題になっていない（中学生にどういう力をつけてきてほしいかというメッセージがない）
- ・ 同じ単位数、教科でも、教員によって進度がバラバラ
- ・ 定期考査や評価も教員個人の裁量で行われ連携が不十分

（2）教科主任 1年目

平成16年度、28歳にして那須先生は国語科の教科主任を任されます。そこでまず取り組まれたのは次のことでした。

- ・ 国語科の目標を設定
- ・ 組織として教科教育に取り組む体制づくり
- ・ 入試問題の改革（外部から評価される入試問題）

那須先生は、教科として何を目標に教育活動をするのかの共通理解を図ることから始めました。国語を通じて、どのような学力を生徒につけさせたいかを明確にし、シラバスを大きく変えていきました。ある程度共通した方向性で教科指導を行い、教師間の指導の差をなくすため、指導方法の共有化や教科全体の指導力向上に取り組みました。そして、入試問題を通じて国語科としてのメッセージ、知識偏重でなく「論理的思考力」を伝えていきました。

こうした取り組み姿勢は授業満足度の変化に表れました。しかし、まだ全国平均を上回ることはできませんでした。当時の成果と課題について、那須先生は次のように振り返っています。

- ・ 少しは組織として機能し始めた（教師が話し合う機会が増えた、核となって動いている教師が出始めた、前向きな意見が出るようになった）

- ・ 組織として十分機能していない、教科指導に対する情熱が全面に出していない（核となる教師が配置できていない、目的を描きつつも手探り状態、生徒を本気で伸ばそうと言う教師の情意が伝わってこない、など）

当時の教科会での資料を拝見しますと、「いかに自らの指導力向上に生かしていくかが大切」「生徒を原因にしていたのでは、進歩がありません。」と訴えています。そし

て、「意欲度・関心度」「予習度・復習度」「学力向上実感」「理解度・好感度」それぞれの項目で、クロス集計分析をもとに有効な動き方の優先順位を確認した上で、どういった授業を意識すべきかをまとめています。また、11月の研究授業の立候補を募っています。この資料からは、那須先生が次のことを意識されていたことが読み取れます。

- ・ アンケートの意味付け（指導力向上に活かす）
- ・ 具体的なアクションプラン及び優先度の提示
- ・ 成果発表の場の設定（研究授業）

広島国際学院高等学校 国語科教科会資料（1） 1年目の取り組み 抜粋

（1）国語科の組織的な取り組みを進める

Ⅰ）各科、各コースの責任者の決定

單元ごとの目標設定、打ち合わせ（月2回程度）、メモを残す

Ⅱ）教材や教科指導を共有できる環境をつくる

定期考査を蓄積し、内容を閲覧できるようにする

（2）教師自身の教科指導力を高める

Ⅰ）研究授業（年2回）、授業参観（年3回）

Ⅱ）授業評価を行い、フィードバックを教科指導力向上に役立てる

Ⅲ）校外研修への参加、レポートの提出

①授業アンケートの結果 意欲度・関心度

(割愛)

②原因分析 授業に対して意欲・関心を持っている生徒の回答と相関の高い授業要素

・生徒の理解度を確認している

・教科書以外の教材をうまく利用している

・授業のポイントをはっきりさせている

③意欲・関心を高めるための具体的プラン

・授業の目標を明確にし、定期的にその理解度を測るテストを実施する

・まとめ方が上手な生徒のノートを公開し、他の生徒の参考とする

(3) 教科主任 2年目

次の年、那須先生は次のことに取り組みました。

- ・ 国語科の目標を再設定
- ・ 組織として教科教育に取り組む体制づくり

那須先生は、再度教科として何を目標に教育活動をするのかの共通理解を図ります。そして、前年度は急に教科主任に任命されたためにできなかった人事配置にも手を入れました。その結果、平成17年度前期の授業アンケートで、平成16年度前期から飛躍的に結果が向上し、全国平均も大きく上回る結果となりました。その成功要因として、那須先生は「組織として機能し始めたこと」を挙げています。具体的には、次のようなことができるようになったとおっしゃいます。

・ 「同じ教科、科目の教師が話し合う機会が増え、それを授業に反映できるようになった」

・ 「核となる教師の動きが組織の動きとつながり始めた」

・ 「自分たちの頑張りが生徒に伝わる喜びを感じる先生が増えた」

また、「現状を何とかしたいという教師が多かった」ことが、新しいことを始めるときの後押しになったそうです。そして、そうした教師陣に「大変感謝している」とおっしゃいます。その感謝の念を示すために、懇親会の席を設けたこともあるということです。根回しは必至で行ったということです。全員が集まる際には30分前に部屋に入り、綺麗に掃除して飲み物なども用意したといいます。一学年が若い自分の言うことを聞いてもらうためには、行動を示し、結果を残すことが必要だとおっしゃいます。

(4) 教科主任のリーダーシップとは

これまでに見てきた那須先生の取り組みから、教科主任のリーダーシップについてまとめたいと思います。「組織的取り組みを実践するために」ということで、那須先生は次の3点を挙げています。

- ・ 現状の課題を分析し、解決に向けた行動を起こす
- ・ リーダーが、不転の決意で行動を起こす
- ・ リーダーが、行動し、実践し、模範となる

那須先生がどのようなことを意識されていたかは、次のインタビューからも読み取る
ことができます。

「どうやったらみんなに動いてもらえるか。それをずっと考えていた。大学で自転
車をやっていたが、これは実はチームでないと勝てない競技。」

「勝つためにそれぞれで何を課題としてトレーニングしなければいけないかを考え
る必要がある。自分で課題を設定し、努力する力が必要」

このインタビューから、那須先生が「チームとして取り組む」ことと、「目的的に活
動を構成する」ことを意識されていることがわかります。

那須先生にはロマンテイストな部分や、熱い部分があります。国公立クラス高校3年
生の最後の授業で那須先生がテーマとしたのは「夢」でした。東京大学で出題された若

林幹夫の「熱い都市 冷たい都市」の文章に、これから大学受験に向かう生徒たちの状況を重ね、「世の中にはいろんなところにこういった構造つていうのが含まれてるよ。」と授業を通じて生徒にメッセージを送ります。生徒に那須先生のことを聞いたところ、「すごい一言です。」「過労で休んでる時も学校に来てた」と、その熱意が伝わっている答えが返ってきました。この授業の後のインタビューでは、那須先生の様々な工夫や取り組みをお伺いしましたが、「僕、ほんと生徒が好きなんだと思いますね。」「行きつくところはそこかな、って思いますね。」と話しています。この愛情と熱意こそ他の先生や生徒を動かすものなのでしょう。

※リーダーシップについては、神戸大学の経営学者でありリーダーシップやキャリア開発を専門とする金井壽宏先生の「働くみんなのモチベーション論」（2006年 NFI出版）や、「リーダーシップの旅 見えないものを見る」（野田智義共著 2007年 光文社新書）などが参考になります。

3. 授業満足度が向上した教員の取り組み

授業満足度の向上した先生はどのようなことを意識されたのでしょうか。そこで東京都の創立学園高等学校（共学）において、2005年後期の結果に比べて2007年後期の結果が向上した先生がたに、次の項目について具体的に取り組んだことをアンケート用紙に記入してもらった形でお応えいただきました。

質問項目 「次の項目について具体的に取られたこと」

「授業内容での重要ポイントが分かりやすいと生徒に感じさせる工夫」

「前向きな姿勢で授業を受けられるようにさせる工夫」

「生徒の理解度の確認方法や頻度、指導案、シラバス（学習目標）」

「教科書以外に使われている教材・プリント、紹介している知識」

「態度の良くない生徒の注意の仕方」

「話し方や板書の工夫」

(1) 英語

「授業内容での重要ポイントが分かりやすいと生徒に感じさせる工夫」

- ・ 板書の色を統一させ、重要ポイントを視覚で記憶に残すようにしている。
- ・ 予習を徹底させ、あらかじめ自分で理解できなかった箇所を確認した状態で授業に参加させている。
- ・ 予習をしてこなければ付いていけないスピードで授業を行い、予習の必要性を認識させる。
- ・ 生徒達が携帯している他の参考書とリンクさせるように、「この参考書の〇〇ページに載っています」と伝えてあげる。

- ・ 授業の最初に、「この授業内のポイントはここです」「この授業内でポイントが〇つでてきますからね」といったことを伝えることで、先に自分のビジョンを見せるように努める。

「前向きな姿勢で授業を受けられるようにさせる工夫」

- ・ クラス編成が習熟度別なので、1つ上のクラスに追いつくことをクラス全員で目指すよう働きかける。
- ・ 生徒をけなすことは絶対にしない。達成度の低い生徒にも、達成できた数少ない点を褒める。
- ・ 直近の模試や定期試験に照準を合わせ、遠くの目標よりも近くの目標に目を向けさせる。
- ・ 毎回最初の5分で前回触れた内容の単熟語テストを実施している。

- ・ キャッチボール方式で頻繁に生徒の考えを求めるが、その際に生徒のレベルに応じてどの質問を生徒にふるかを選び、なるべく生徒が正解できるような形にもっていく。

- ・ 自分の予習の確認、復習に有効利用できるような解説プリント作り。

「生徒の理解度の確認方法や頻度、指導演、シラバス（学習目標）」

- ・ 単なる知識だけでなく、しっかり考えなければ答えが出ない点を生徒に当てて答えさせる。
- ・ 最低限1回の授業で全員に当たる頻度を守る。
- ・ 毎時間、最初の5分で前回の授業内容を反映した単熟語テストを行う。

「教科書以外に使われている教材・プリント、紹介している知識」

・ Next Stage (桐原書店)、Forest (桐原書店)

・ 自らの海外生活で体験したエピソード

・ 英英辞典に載っている各単語の定義

・ 単語を紹介する際に、語の作り(語源)で覚えやすそうなものはできるだけ伝える。

「態度の良くない生徒の注意の仕方」

・ ある程度の時間放置した後、話を聞いていないと答えられない質問を投げかけ、答えるまで待つ。

↓「分かりません」という返事は絶対に許さず、とにかく待つ。

↓自分が原因で授業が止まっていることを意識させ、

他生徒に対して迷惑をかけたという気持ちを持たせる。

- ・ あえて指して答えを探させる、考えさせることで、授業に参加する一員である
ことを意識させる。

- ・ 提出してもらったノート等にモチベーションが上がるようなコメントを添える。

「話し方や板書の工夫」

- ・ 全生徒にしつかりと声が届くよう、前向きな口調で元気よく大きな声で授業を行う。

- ・ 絶対にしかめっ面をしないことを心掛け、自分も授業を楽しむことを強く意識する。

- ・ 3分の2程の生徒が板書をノートに写し終えるまでは待つ。
- ・ 板書はルール別に複数色使う。復習時に「見て楽しい、分かりやすいノート」になるようにする。
- ・ ポイントとなる部分だけ黒板一杯に書き、色をポイントの種類により3色(白・黄・赤)使う。授業により集中してもらうために、日本語は漢字を書けるようになってもらうために、言葉で伝わるものは大きくはつきりと声に出すようにする。

「その他」

- ・ 4月の第1回目の授業でどれだけ生徒の心を惹きつけることができるかに重点を入れている。

- ・ 複数の学級の生徒が集まったクラスなので、このクラス独自の帰属意識を高めるよう意識づけている。

- ・ 「なぜそうなるのか？」ということを理解できない生徒には、授業時間外でも必ず相談に乗る。

(2) 地歴公民

「授業内容での重要ポイントが分かりやすいと生徒に感じさせる工夫」

- ・ 授業の中で複数回、重要なポイントに触れる（その時に↓途中で↓最後に復習を兼ねて）
- ・ 大切なポイントとそうではないところでメリハリをつけるようにしています（色・声・黒板を叩く）。

「前向きな姿勢で授業を受けられるようにさせる工夫」

- ・ 授業に関係ないようで、実は関係のある雑談を1授業に1つ用意するようにしています。

「生徒の理解度の確認方法や頻度、指導案、シラバス（学習目標）」

- ・ 1週間に1回小テストを実施し、定期試験前に小テストをまとめてもう一度やらせています。

「教科書以外に使われている教材・プリント、紹介している知識」

- ・ 授業は板書が中心で、板書の空欄補充のために教科書を使わせています。また、地図や位置関係を把握

- ・ させたいときは、資料集を見せるより実際に黒板に書いてノートに書かせるようにしています。

「態度の良い生徒の注意の仕方」

- ・ 指して発言させまくりません。

「話し方や板書の工夫」

- ・ 言い直しがないように心懸けていますが、噛んでしまうことが多いです。
- ・ 声は大き過ぎず小さ過ぎず、はっきりと話すように心懸けています。
- ・ 板書は意図を持って色分けをしています。

「その他」

- ・ あとで生徒がノートを見直した時に、なんとなくでも授業の流れを思い出してくれるようなノートになるように、板書内容を工夫し、基本的には話したことも何でも黒板に書きます。その際、チョークは青を使って、事前に生徒に意図を説明しました。

ここでご紹介した事項については、どの教科においても共通する項目があるうかと思えます。その意味で、「当たり前」のことと言えるかもしれませんが。おそらく、ここで紹介させていただいた先生方の授業満足度が高まった理由は、この「当たり前」のことを「徹底してやった」「意識して行った」という点ではないかと考えます。ぜひ、ご自身の教科内でもそれぞれの工夫を言語化し、共有し実践いただければと思います。

4. まとめ 授業カンファレンスをはじめましょう

(1) プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ(PLC)

近年、アメリカで「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ(PLC:専門
家たちによる学びの共同体)」という取り組みを始めている学校や自治体があります。
これは小学校であれば学年で、中学校であれば教科で、毎週1回集まり、子どもたちの
学びや成長について話し合う取り組みで、日本の教科会や学年会に相当するものです。
毎回、つぎの手順で話し合いが行われます。

1. 子どもたちは適切な教材やツールで学んでいるか
2. 子どもたちが学んでいるかどうかをどのようにして知るか
3. もし子どもたちが学んでいなかったらどうするか
4. もし子どもたちが学んでいたらどうするか

こうした話し合いを通じて先生の専門性を高めると同時に、先生たちの同僚性も高めること、授業改善に向けたチームづくりを行います。

実際にこのプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを実践されているアメリカの学校の先生にお話を伺いますと、毎週の話し合いが定着した後は、相互授業見学の文化を定着させることが次のステップだとおっしゃっていました。こうした話しを伺いますと、授業研究の文化については、日本の方が先を行っているように思います。授業研究に対応する英語はレッスンスタディ²とされています。では、日本の授業研究は今日どのようになされているのでしょうか。

(2) 授業カンファレンス

授業研究を専門とされる稲垣忠彦先生（信濃教育会教育研究所所長 東京大学名誉教授）は授業カンファレンスを行うべきだと言います。カンファレンスを、「医師が臨床の事例に基づき、集団的に診断と治療法とその結果を検討し、一人ひとりの判断を交流

することによって意思としての専門的な力量を發展させていく場であり、それを通して、経験を共有していく場である。」³と定義されています。そして学校でも、「授業を協同で検討し、参加者の児童観、授業観、教材観を交流しつつ、その授業の検討をすすめ、参加者一人ひとりの力量を發展させるとともに、それを基盤に、教授・学習の理論を形成し、さらに、それを通して教師というプロフェッションの力量と水準を高めていくことはできないだろうか。」と問いかけます。

これは、教師も医師と同様にプロフェッションとして、省察と協働に基づきその力量を高めていく必要があるということだと思えます。つまり、自分達の授業を振り返り、チームとしてよりよい授業づくりに取り組んでいくことが求められているといえるでしょう。なぜ、こうした授業カンファレンスが必要とされるのでしょうか。1970年代に、授業分析の目標を明確にし、教授・学習活動を記号化し、数量的な分析によって授業のパターンを明らかにしモデルをつくるという授業研究が流行しました⁴。しかし、より授業のリアリティに即した問題を検討する場が求められ、こうした授業カンファレンスが必要とされました。カンファレンスは次のような手順で進められます。

1. 同じ学年の二人の先生が同じ教材で授業をして、ビデオにとる。

2. カンファレンスで、そのビデオを再生する。

参加者が授業を観察しているときは、部分的にみる。

3. 参加者全員が、一言づつ、気がついたこと、

発見したこと、自分の意見をのべる。

カンファレンスの目的は、授業の特質や改善点を様々な視点から捉えるとともに、参加者一人一人が持つ視点を問い直し、確認し、学校全体でもつべき視点を共有することにあります。したがって、どちらの授業がよいかという評価でなく、参加者一人一人に

どのような気づきが起こったのか、ボランテニアとして授業を提供した先生がどれだけ意欲的に授業改善に継続して取り組むようになるのかが大事になります。

コメントも、授業者がどうすべきだったのかではなく、授業中に生徒がどのような学びをしたのか、参加者（発言者）自身の中でどのような気づきがあったのかを中心とします。そして、一人の参加者の気づきが他の参加者の気づきにつながるように、グループダイナミクスが起こるような「場」づくりを工夫します。参加者が多い場合は、一人当たりの発言の時間が少なくなりますので、4人グループになって意見交換をする時間を作ってもよいかもしれません。

授業アンケートは、こうした日々の実践と改善を伴って初めて意味をもつものだと思います。多くの学校でプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティや授業カンファレンス（公開授業研究）に参加し、交流されるようになれば良いと思います。これらの取り組みを始めたいとお考えの先生がいらっしゃいましたら、私たちにぜひお声掛けください。

以上

1. Richard Dufour 他著 「Revisiting Professional Learning Communities at Work: New Insights for Improving Schools」 Solution Tree 2008
2. 秋田 喜代美 キヤサリン・ルイス 「授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない」 明石書店 2008年
3. 稲垣忠彦 「授業研究の歩み 1960・1995年」 評論社 2002年 398ページ
4. 稲垣忠彦・佐藤学 「授業研究入門」 岩波書店 1998年 172ページ

ケーススタディ 聖望学園における学校改革

2008年2月27日全国研修交流会講演録

講師 大谷明先生（元教頭・数学科）

（1）変革の歴史

実業学校から「敬愛信義」を掲げるミッションスクールへ

ここ数年でもって東大に何人入れたぞとか、そういう事が堂々と言えればいいのですが、残念ながら、まだそういう風な形で、いわゆる本当にそういう様な目で見られると、まだまだだなどというような状態なんです。でも、逆に言えば、そこを随分苦労してやっている部分もありますので、その辺の苦労話をさせていただいて、その方がもしかすると先生方のご参考にはなるかも知れないな、という事でご理解いただければ

と思います。こういうものは、あまり慣れていないものですから、ちよつと失礼な事があると思いますが、是非お許しください。

昨年の春にですね、春の選抜の甲子園に出まして、選抜初出場だったわけなのですが、なんだか決勝戦まで行ってしましまして、少し全国に名前を知っていたく事ができたわけなのですが、それ以外のところからすると、全国規模でいくとまだまだどんな学校なのかな？というところなんですね。ルーテル系のミッションスクールで、創立はトータルでいけば90年ですね。聖望学園となつてからは60年近くというような、そういう状態の学校です。私は、大学を卒業して、青年海外協力隊というのに参加して、アメリカボケのままフラツと日本に戻ってきて、どこかに就職するか、という事で、何気なく入ってしまったって、それが24年前です。そのまま、あれよあれよと思つているうちに、今、4年前には教頭というポジションに就かせていただいたという者です。ですから、ここ二十数年の学校の流れをお話させていただくのが先生方のご参考になるかなと、思つております。

本校は、まず成り立ちが埼玉県飯能市の養蚕の実業学校としてスタートしているんですね。それが大正で、戦後、経営が非常に難しくなると。その時に、戦後、教会が飯能に来ていまして、そのアメリカの教会が経営をその引き継ぐと。その後、日本の中にルーテル系の教団が経営をさらに継いでという形なんですけど。ですから、昭和の26年になるんですけども、そこで聖望学園ということではつきりなつたと。それから本校の歴史だという風にいえると思います。

ただ、その前身の飯能実業学校が、長い期間学校として成り立っていた関係で、本校の傾向はまず、地元ですね。地元の影響が非常に強いという事。それとあと、教団ですね、その2つの影響の中で運営されているという事なんですけれども。こんなお話をしますのは、先生方ご理解いただけるかと思えますけれども、私学というのは、この成り立ちによって随分、学校風土が違ってきたとして、その辺が学校運営にも色々影響してまいりますよね。本校はミッション系ではあるのですけども、純粋なミッションとはならず、地元との繋がりを重視しながらやっていくという傾向を持っているという事です。聖望学園に変わって、アメリカの教育制度が取り入れられて、モジュラースケジュ

ーリング というんですが、ようするに、生徒が自主的に講座を選んでそれで授業展開する。その間には空き時間も随分あったようなんですね。そういうアメリカの方法を取り入れてやっていたんですね。

でも、これは、実施するには、実は相当な資金力とかそういうものがどうも必要だったようで、大分それが形骸化していたようなんです。私が来る少し前の進学実績なんかで言いますと、専門学校が8割以上で、大学に数人とか、ようするに私学の底辺校だったわけです。そういう状態になっていたわけです。その二十数年前のところから少子化ということがそろそろ言われていましたよね。このままでは、まずいという、当時の中堅教員達が動き出して進学という事を強く打ち出したということですね。

(2) 進学路線の強調

燃える進学教育

ちやうどそのところで、私は本校に入るといふようなことでした。私が入った年に、私、いきなり担任を持たされていきますけれども、2年目になってそこで初めてその学校で文系・理系の別ができた、その程度の学校だったわけです。理系のクラスが1クラス作られて、私は、聖望学園に来て2年目でもってその担任を持たされて、やると。その結果は惨憺たるものだったわけですけれども、その翌年から今度は特進コースというのができて、そこでも特進コースの最初のホームルームを持たされるというような。自分では新任のつもりで入っているんですけども、何だか訳の分からないうちにいろいろと使われていた……という状態だったんです。このところで大きく変わったようです。その前のよく分かっていない部分もあるんですが。放課後の講習、朝の講習、そういうところでは相当な時間を費やしていましたね。

私自身も朝7時位から生徒の面倒を見て、夜も9時10時までつきあって……なんていう事をやっていました。また、勉強合宿ですね、というものも始まると。その時のスロークラスが「燃える進学教育」というミッションスクールとは思えないもので、一時やっていたわけですね。また、制度的にも色々なことをやりました。選抜クラスとか当然設

けて、いくわけですけれども、先生方の学校ではその選抜クラスを設けたときに、定期試験なんかの評価・評定ですよ。それをつけるところで何か問題になられた事はありませんか？ 私どもの学校では、結局、選抜クラスを設けた時に、上のクラスは難しいテストが実施される、下の方のクラスはやさしいテストが実施される。その当時は、テストの素点で、教員が成績つけるのが習慣となっていましたから、妙な事が起こるんですね。選抜クラスの子の方が成績が悪くなるという……定期試験で。そんな様な事があったりしました。これは私の発案だったわけなのですが、（実力的には、上のクラスの方がいいから、いい成績をつけてあげないといけない……だったらどういう風にして補正をするかという事だったので）私は統計が専門で勉強していたので、統一の実力テストをやって、平均値と標準偏差がありますから、定期試験の（点数）を実力テストに偏差値換算するというような形で、選抜クラスの成績の補正をやりました。

これもつい、6年位前までこの状態が続いていたんですね。後でお話しますが、やってみて暫くたって、これはまずいことをやっとなと自分で思いました。というのは、偏差値で細かい数字が出てくるんですよ。ほんの1点2点のことでも、当然のことながら

序列ができますよね。でもいったい、この序列にどれ程の意味があるのかと。まあ、教員の方はそれでもって、自動的に1つの数字の流れが出てくるので助かった部分もあるんですけども。これを教育的な観点から見たらちよつとこれは、というのがありました。そんなものも、しかし続いていったというのがあります。

追試制度

それと、本校で進学路線とって、1つの売りにしていたのは、追試制度でした。追試制度：定期試験で50点以下の生徒に対しては追試を行うということ。それも当初燃えていた頃はエンドレスでやるぞ、合格するまでやるぞということをやっていた。そうしますと、これも徐々に徐々に、その難しさというか弊害というか、そういうものがわかってきたわけです。数学なんかは比較的やりやすいんです。これはまだ。少し数字を変えたりなんかで、問題何とか作れますからね。困るのは、英語だとか国語ですよ。出せと言われても、1つのテストが終わって50点に満たなかったから次の用意してくれ

と。まあ、最初のうちはみんな頑張ってやっていたんですけども、だんだんそれが疲れてきてしまうわけですね。しかしまあよく頑張っていましたね、皆。十数年これやっていましたからね。なんと言うか、学校という所は一度ルールに乗ってその形が決まると、何かそこからあまり外れたがらないですよ。その流れですと行き始めるんですよ。色々と苦勞しながらでも、なかなか変えようとしない、というようなそんな事があったような気がします。

これはただ単に教員の苦勞だけではなくて、要は、追試をするための日程を組まないといけないわけですね。定期試験が行われた後、追試をやる、それも50点以下ですから、大量になるわけですよ。そうすると、その子達を追ってテストするという事は、（追試と言うか、正式には再試なんですけど。再試制度と言った方がいいでしょう、それに追試という名前をつけたからそう呼んでいます）そうすると、また各教科毎に、定期試験が終わった後に、この日は数学の追試の日ね、その次は国語ね、という形で、結局、定期試験の期間というのが長引いてしまう。そういう諸々の事がありました。ただ、この二十数年前の変革のおかげで確かに、レベルはドーンとアップしています。私どもの

近くですと、川越高校だとかが県のトップレベルになるのですが、その併願校として並ばれるようになったと。当時はそういったところでの指導というのでは、比較的早い段階で我々はやったのかもしれませんが。ただそのおかげである程度のレベルの生徒が集まるようになってきて、そこそこそんなに大きな問題もなく、ということその後十数年何とかやっている……という状態だったわけです。ところがその後、やはり先程言いましたような教員の負担であるとか、もう少し授業時数を増やさないといけないのではないのかというようなことが、出てきまして、現在のまた次の改革期を迎えています。これが6年前です。

変わらない学校

6年前は今の校長ではなく、前の校長がおられた時に、その校長を中心とにかく学校を変えていこうというような動きがまた出てきたわけです。それで、先程言いました偏差値をめぐるこの評定のやり方は、これは廃止しました。ただ、選抜クラスっていう

のは依然存在していますから、その補正をどうするのかという問題がありますよね。実は、簡単だったんです。その簡単な方法も随分前から気が付いていたのですが、なかなか学校という所は変わってくれないもので、意見聞いてくれないんです。単純なことですが、やはり実態をもとにするわけですよ。

5段階に分けて、各段階毎にクラス別に何人いるかやっていくと、偏差値のように連続量ではなくて、整数、自然数で、何組は5が何人程度取れるグループであるという、一種の実体のあり方が評定獲得の道具みたいにして使うわけですけども。そのようにして、一応選抜クラスというものをもうけた時に、ある程度公平性がある分配。ただ、これをびったりそのままやっているわけではないですよ。当然のことながら、定期試験は（模擬試験とは）、性質の違うものですから、それを目安にしながら、評定をつける割合の目安をつけていくというような形です。そんなことがあります。また、さらにまた最近もう少しやり方の工夫をしたりとか、評定のつけ方を変えたということがあります。

二学期制

また、6年前手っ取り早い所で始まったところが、追試制度の撤廃と同時に授業時数を増やしてみようというので導入したのが、2学期制。これにつきましては、先生方もよくご存知だと思いますが、これは、日本の風土の中では、なかなか難しい部分がありますよね。

完全に公立学校が2学期制でもって移行してくれば、部活その他の弊害が随分なくなるんでしょうけれども、どうしても、部活その他の関係が出てきますので、その関係で、2学期制については、今でも導入してそのままになっていますけれども、色々どうも扱いにくい所だなという、決定的な改善の決め手になる手法ではないな…という気はしています。

ステージ制

改革のスローガンが2つありまして、コースの明確化という事と、中高6年間一貫におけるステージ制というようなこと。これもよく言われることなので、それほど新しい事ではないです。ステージ制については、どこでも言われる事が中学3年から高校1年生の引継ぎのあたりのところの中だるみ。これをどういう風に構成するか、持って行くかだというような事。それと進路に向けての意識付け、何かその辺で効果的な連続した事ができないかとか。そういう事のからみで、良く出てくる事だと私は理解しています。先程、私共がステージ制といった時に、もう一つあったのは、6年間を2・2・2とやっていった時に、実は意識したのが、高校2、3年の2年間です、そうすると、そこに教師を固定したとすると、2、3、2、3と繰り返す事になってしまいます。これは、教員の進学指導に対する指導力育成と言う意味では確かに役に立つだろうという風に見ました。それは、確かに私自身はあつたろうと思います。

ただ、今現在、別のやりにくさが出てきて、そこを見直しというような部分が、声が出ています。確かに、高校3年生ばかりずっと連続して持つ先生とか時々いませなかね。そういう人達は、確かに3年の指導の内容を繰り返してやる事

でもって、力をつけてますから。私なんかもう数Ⅲ・Ⅳを教えなくなっただけから十年くらい経ってしまったている。こうなると、もう、理系の3年の指導は結構辛いものがありますよね。ですから、今度教える場合には、かなり勉強し直して、入試問題も解き直してからやらないといけないなあという感じがするわけですけども。その部分では良かったんですけども、また、色々議論する部分が出てきた。

特進コース

それと、コースの明確化というのは、特進コースを設けていました。そのときに、一般のコース今は、総合進学コースと言っていますけれども、一般コースや総合進学コースのところ、学力が上がって来た子達ですよ。を、以前、特進コースの方に移行させていたわけです。これは、一体どういう事なのかと言うと、まあ何を言ったとしても、要するに特進コースというのが、お勉強のできるお利口さんのコースで、もう1つのコースは、そうではないんだと。どんな説明をしたって、要はそういうことですよね。や

ってる事は。そういう風な事をやっていけば。それが果たして、いいのかという部分です。ね。

それと、それぞれ先生方のモチベーションというか、意識の問題でもあるというのも、やはりそういう事です。ね。総進コース・一般コースの先生達が、自分たちが努力して、教えた子達は、良くなれば特進……。俺達は一体何なんだという様な、コース別での教員の意識が出てきた時には、そこは当然気になる所だろうなと思います。それを、止めたんです。止める事によってやはり、当然の事ながら、特進コースが以前に比べて手薄になって、学力の備えが薄くなってきているのではないか、というような声がチラホラと、聞こえてます。ね。特進コースの方の規模が各学年100名程度、総進コースが約200名というそんな割合の規模でやっているわけなんです。そういった事でその辺の改善も目指そうということですね。

制服

制服についての変更は去年のところでは、変革の流れがある程度できるまでは、制服には手をつけまいということで、やっていました。そんなもの変えたところで、一時のことだろうと。ただ、本校の制服と言うのは前のが非常に無かったんですね。とりわけ人気がなかったです。何となく緑っぽいグレーでして、近隣の生徒からは、青カビ制服とか、そういうあだ名がついてしまつて、これはちよつとな……というのが長らく続きました。しかし、そんなこと気にしているのではない。私自身は実は、前の制服の方が好きなんですけれどもね。変えたくはなかったんですけれども。しかし、まあ時代の流れの中では、去年のところ変えましたが、確かにそうすると、女の子は若干浮かれますかね。その辺の影響はあるんだろうと思います。ただ、それが学校の評価そのものでは当然ないわけで、これは、副産物という風に理解しています。

甲子園

あと、甲子園ですよね。そういったものは、確かに効果がありますよね。甲子園に出て効果があるのは、過去3回目なんですよね。様子を見てみると、甲子園に行くと確かに生徒が増えますね。ただ、影響があるのは2年間ぐらいですかね。ましてやこの少年化の中で、それほど大きな事を期待してはいけない部分があると思います。ただ、学校全体の生徒の愛校心といえますか、そういったものを盛り上げるには、有効には確かに機能しているなと思います。

(3) 授業改善

授業点検アンケート

ヒューマンリンクさんは授業のアンケートを大変うまく使うように仕向けたという部分があるかとおもいますが。

授業改善というのがこのところで、この学校のテーマとしてきました。私が4年前になりました、ヒューマンリンクさんのこの授業アンケートを利用したのは、3年前か

らなんですけれど、最初の年のところで、私が手作りで、私自身が質問紙を作って、授業のアンケートをすることをやりました。先程も言いましたように、統計が専門だったので、そういったことは多少慣れがあったものですからやってみました。ただ、分析・その他というのをやっていくには、若干時間を取られるかな…というので、ヒューマンリンクさんをお願いするという事で3年前からやっているわけです。最初の年は、（3年前には）2回やりました。でも、2回とって、実施して報告会やるという時間がなかなかとれないんですね。学校が忙しくて。それで、今現在は、（この2年間は）1回にしています。これが教員に向けて私が配っているものです。ご覧の通り私の名前で出しているということは、要するに、管理職主導のアンケートです。別の学校では、教員の方での委員会作ってというようなやり方もあるようですが。本校の場合には、これがきつと自然な流れだったと思うのですが、管理職のほうで指導してやっていくという形をとっていったということです。定期試験の最終日の時間を使ってアンケートをとる。これもどうも、中学生だと、なかなか1日でも随分時間がかかってしまうから、ちよつと疲れてしまうという様子が見られたものですから、5教科については授業中に実

施するという形で今、やっています。教員にも答えさせて、報告会を7月（夏休み前に）実施するというような形ですよね。

名前を「授業点検アンケート」という風な形に今、しているわけなんですけど、点検という事で、要は、まあ改善でも別に構わなかったらうと思えますけれども、実施するに当たって、多分こういうアンケートをやったら、教員の人事評価に用いられるだろうと、多分一般教員がそういう風にとっているだろうということは充分予想できるわけ。ただ、こちらの眼目は、授業をとにかく良いものにしていくように指導していくしかないので、ということだったんですね。そこを「点検アンケート」というネーミングに含ませているつもりではありません。

ただ、これもまた、どういう言い方をしたとしても、でもやっぱり評価されているってとりますよね。思いませんか？どう考えても。例えば、仮にアンケートを教員同士の委員会で行ったとしても、やはり、アンケートをやる一人一人の先生の中にはそういう受け取り方の方がいるのではないんですかね？どうでしょうか？これは、一種の教員に対する批評を書かなければいけないですよね。やっぱりその側面というのはどうしても

あるんだろうなど。ただ、やはり繰り返し繰り返し、「先生方の授業を検討してほしい」とこちら側は言うしかない。

専任の教員はこれに対してはそれ程のプレッシャーは感じないんですよ。見てみると。非常に感じるのは非常勤ですよ。これもやっぱり当然ですよ。翌年ちゃんと契約更新になるんだろうかとか、そのためのどう考えたって、これは1つのツールに見えますよね。我々も何かでそれを使って、実際この先生は何点だねとかやっているつもりないですけども、当然私たちはこれを見ているわけで、先生に対する評価の一端をこのアンケートは担っていますから。そういう現実って言うものがあるっていうことは、認識しながら、運営をしないとイケない代物だろうとは思っています。

授業点検アンケートについては、こうやって管理職主導で始まったわけですね。「授業を何とかしよう」という声は、教員の方からも上がっていたわけなんです。実は、このアンケートの使い方は、一部の教員からは「校長・教頭はなまぬるい」と。このアンケートの使い方が逆にね。そういう風に言われたりもするんですよ。そういう先生達って言うのは自分の授業にはすごく自信を持っていて、うまくいっていない先生達の授業

に対して非常に不満を持っている人たちです。そういう人たちからすると、管理職はそんなことやっているんだったら、どんどん判断していけよ、みたいな逆にこちらがせつつかれるんですけれども。それをあまり容認するのは、学校の風土を作る上で、よくないと思っています。やはりそれは、あるべき姿ではないと思ってますので、こちらはできるだけ穏やかにやるつもりでいるのですが。

教員の授業見学週間

それで、教員達が自分たちでやり始めたのが、教員の授業見学週間です。これは、進路指導部中心でやっているわけですが。オープンクラスという名前がつけています。公開授業の実施ということで、これは、秋の11月から12月にかけて、これは昨年度の資料ですが。2週間程度をこれにあてて、お互いの授業を見ていこうと。見る前には、事前の予約といいますが、「いきますよ」ということを伝えて、そしてコメントを書く

というのを使って、予約をしたり、感想を書くというようなことです。これも教員がこういう風な流れを作ってくれたのはすごく嬉しいことだと思っています。

先生方の学校では、校長・教頭が授業を見に行くというのが普通に行われているかもしれませんが、僕の場合には、まだそんなに普通には行っていません。やっぱりそれを見るには、なかなか時間を取れないところもあるんですけれども、気になる所は見に行ったりもしていますが、なかなか全体見ていられないという、ま、こういう形で授業を見る機会があるのは嬉しいことだとは思っています。ただ、その先生の問題点云々というのは、授業を見た時ではなかなかわからないですよ。だいたい、他の教員が入って来ただけで、生徒の反応違いますもんね。これは非常に大きいですよ。普段の授業よりは多少の緊張感を増して、やっているわけで。しきりと教員の評価をしろと、管理職なまぬるいぞと言っている諸君が「もっと授業をみて」といわれるんですけれどね、授業を見てそれで全てわかるかという、やはりそういうものでもないだろうなと思っています。だから、授業の改善という事に関しては、管理職や他の人間から、あれやれ、これやれと言われるよりは、やはり自分のほうから、主体的に変えていくというその動

きがないと、まず無理だろうと思うわけです。ですから、先程の授業点検アンケートがプレッシャー与える部分ではあるんですけども、そういう中でとにかく自分の問題点を抱えながら、やり直して言って欲しいという事を繰り返し訴えていきたいと思っています。

(4) 数学科の取組み

高3理系 数学I・II AB 演習授業の場合

見たところ、数学の先生が多く来られているようですので、少しその辺の事の説明をさせていただきます。

予習復習の伸び

今年度の授業点検アンケートをやって、ヒューマンリンクの新谷さんのほうから、嬉しいご指摘を受けたんですけども、悲しい指摘はいっぱいあるんですけども、嬉しい指摘というのは、「高校3年生の予習・復習の時間というのが、昨年度に比べて随分伸びていますね」と、そういう指摘を受けたんですね。で、「どんなことされてるんですね」ということ。じゃあこの、講演会をお引き受けするかと思つたのもこの所だったんですけども。そういうデータが出ているのなら、一体何が違うのかなと、ある程度比較検討できる材料が何かないかと、思つたところで出てきたのが、リーダーチャートですね。これは、実は私のグラフです。他の教員を見せては申し訳ないので。教頭ではありますけれども、数学も一部持つておりまして、昨年度と今年度と全く同じテキスト使って、同じような集団で授業をやつていまして、見て分かるように、確かに今年のは予習・復習増えている、というところで、その差は一体何なんだろうなということまで、考え出してみたわけで、そのあたりの話をしたいと思えます。

まず、別に昨年度と今年度と、私自身がそれほど大きくやり方を変えているわけではないので、基本的なやり方ですね、私自身の指導の仕方をまず簡単にお話しておきたい

のですけれども、極めてオーソドックスな授業です。問題集が、タイプ分けによる数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bという、そういうものなんです。これはそんなに難しい問題集ではないんです。

「数学は要らない」という生徒を相手に

私のところの授業は生徒が15名前後という、そういう授業なんです。高校3年生の数学Ⅲの裏番組です。理系クラスで。理系のクラスで数学Ⅲ、以前は全員取らせたりもしたんですけれども、なかなか大学の受験の形態が変わって、数学も随分いらなくなってきましたという傾向から、理系の子でも数学のⅢ・Ⅳを取らずに受験という子ができています。専ら、生物系とか看護系とかそういった子達です。その子達がとっている授業なんです。学力レベルからいくと、上の子が60ちよつときってしまうようなところ、進研模試で。下の方はもう、際限なくてですね、中には40切るような子も混じっているというような、クラスなんです。先生方もお分かりのように、「もう数学はいらない」

と言って集まってきたているんですが、そのいらな中にも分類が随分あるんですよ。
数Ⅰ・Aだけでいい、数Ⅱ・Bまでは使う、中には数学は全然いらななんていうのも交
じっている、そういう授業なんです。だから、やりにくいと言う意味では、非常にやり
にくい授業ですよ。

通常考えても。やり方とすると、単純な事で、「じゃあ、来週の授業では誰々、ここ
の番号で」と、予め番号を指しておいて、次の授業の時には黒板に書いて、答え合わせ
をするという何の不思議もない授業をやっています。

ノート提出

ただ、全ての問題は必ず解けるといふことで、問題集のノート提出ですね、それはさ
せるということですね。それをできるだけ頻繁に提出させて、自分が当てられた番号だ
けではなくて、他のものもやるように仕向けるということは心掛けていますね。後、こ
の程度のこと、生徒のやりがちな事は、別の所から解答を持ってきて、それで黒板に

書くということですね。これはやらせたくないわけです。この授業に限らず、私は自分の授業のところでも言っていることですけども、「私の授業の時には、とにかく間違えろ」と、「正解なんかお前達に聞いたって、俺は何も嬉しくない、お前達が間違えてくれるから、俺の商売が成り立っている」ということですね。解らなかつたら、解かした所までのを書けばいいからという事です。万が一まともな答えをどこかから写した時には、激怒して怒るんですけども。そいつなんか放り出すかと言う感じなんですけど。どんな間違えていようが、決して怒らないですね。そういう生徒のお陰で私の授業は成り立つわけで、ある程度書かれている答えであるならば、添削してあげればいいわけですよね。

高校3年生ですから、当然一つの解答になるように日本語は随分補いますね。日本語を補った解答をそこで見せてやって、このところの解答にはこういう説明の方がいいんじゃないのというやりとりをしながらやっていくと。あと中には、全く「わかりません」、前に出てきて「先生何もわかりません」というのも当然いるわけですね。そんなのが出てきた時にも、問題文を読んで、「ここでもってこういう言葉があるけれども、

「ここから何を連想する？」という形ですよ。だから問題を読んだ時のキーワードの見つけ方、それとそのキーワードからどういう事を連想しなければいけないか、思い出さなければいけないか、そんなようなことを、その場でやっていつてやる。それで、少し書き出したとしても、途中で終わってしまうと思うんですけども、その場合にはあんまり、その子にプレッシャーを与えても仕方がないので、そういう時は続きは俺がやるよっていうことで、書いてやるというようなことです。

授業展開

また、あんまりそこで時間を取らせると、授業の流れが澁みますよね。これも先生方はいつもご苦労されておられるところかと思えますけれども。あんまり、澁ませたくないですね。ですから、その辺は適当に打ち切って、「まあ、〇〇は前より良くなったからな」と、そういう形で、励ましながら、やっています。以前別の学校の教員達と、生徒のストレスの研究をやった時期があります。数学っていうのは緊張感高まるんです

よね。これは、やはり出来ないよ（出来ない子の立場に立ってみるとですよ）、本当に緊張するもの。例えば、我々も数学のテストを受けた経験がある、そうすると思いつかない・時間は来る、その時の頭真っ白と言う経験、僕なんかはあるんですけども、だからそういう事を考えると、緊張感をあまり過度に持たせるのは、良くない教科だなと思っっています。ですから、その辺の事で、とにかく間違える事は別に何も悪い事ではないと。

でもね、3年生の7月、8月になっても基本的な事が解っていないと、「何でお前はこんな事も解っていないんだ」と、思わず言いたくなる気持ちもありますが、そこはじつと押さえて、とにかくその子はそのレベルからスタートして受験していかないといけないわけで、それを助けるのが我々だと思っっていますのでそういうことになるということです。そのような授業です。これが去年も今年も別に何も変わっていないんですよ。今年、何が違うのかなというところなのですけれども……。

教員間のコミュニケーション

一冊の問題集を買った時に、だいたい数「 \cdot 」のあたりから始まってずっとやっていくのが、当たり前だったわけなのですが、そこをちよつと変えてみました。去年は、初めてそのテキストを使うという事もあったんですけども、一通り前からやっていったと、いうことで、12月位になってようやく終わったかなという感じでした。

そのテキストが。今一番後ろにいるうちの数学の教員が教えた子を、3年次で私が教えている。(2年次に教えた教員がいるのですが、)彼なんかは、比較的近い所に座っていて「先生、あの子達はどこが苦手ですから、どういう所を重点的にやって下さいよ。」なんて言うね、これは正式な会議とかそんなんじゃないなくて、本当に井戸端会議、すれ違いざま、そんな様な情報をくれて、じゃあ、生徒の授業(テキスト)を始める時に、どの辺から始めたらいいか…。考えてみれば、一応教科書は全部終わっているわけですよ。

「苦手なところからする」

だからまるでわかっていないわけじゃない。ということは、どこから始めてもいいだろうという事で、苦手な分野、それと自分が是非ここからやりたいというのを、書いてごらんという事で、簡単な紙に書かせていって、そして、よくあるように出てくるのは、三角比・三角関数のあたりとか、ベクトルとか空間とかよくわからないとか、そういうような情報を聞いて、だったらそこから始めるかという事で、テキストの流れを全く変えて、三角比・三角関数のところから、授業を展開したわけです。ある意味では、今までやってなかったけど、合理的ですよ。苦手な所からやってあげれば、当然彼らも、何とかしたいという気持ちを持っていますから、彼らの気持ちとやられている事が一致している、そこを何とかしたいと。それで、当然の事ながら、予習・復習には力が入ったんだと思います。

それと後、態度として、私はどちらかというと、先程も言いましたように、緊張感を高めたくないと思いつつやっているものですから、やわらかくなり過ぎる傾向があるわけですけれども、今年度は去年に比べたらもう少し緊張感持たせてみようかなといううなやりとりですね。あまり、慣れ合いにならずに、という事を少し意識しながらやっていってみて、このデータとつたのが、5月の末位ですから、まだ4月始まってすぐくらいの頃です。

指導の成果

このデータを出すにあたって、これ今2月。この時、既に大学がみんな決まっているわけで、どういう結果をみなさんに報告するのかなど思っている自分があったんでけれども、第一志望、第二志望のあたりでみんなおさまっていたようです。北里の生命関係とか、麻布、その辺のところを希望していた子達が多くて、日本獣医生命化学の獣医学

部の獣医の方に、このレベルで獣医さんの学校に入れた子もいます。法政・明治そんなレベルです。

言ってみれば、40台から55の前半位までがメインの子達だったのですが、彼らが一応希望しているところには入った。14名のうち結局どこにも受からなかった子は1名ですね。あとはみな、一応自分の希望に沿ったところに行っているようです。防衛医大の幹部のほうも入っていますし。比較的まともな結果だったとは思いますが。

私自身の様子はこんな感じなんです。ですから、そんなに予習復・復習の率を上げるのに、変わったことをやったわけではない。確かに、生徒の声を聞きながらニーズに合わせてやっていっているという事だろうかと思えます。

3 回直しノート

もう一つ忘れては駄目だなど思うのは、この生徒達は、今年度は私に教わっていますけど、その前には後ろにいる塚川君とか、そういうほかの教員に習っている。その教員達の努力というのがやはり、あるわけですよ。

今、数学科の教員、特に特進コースの教員達が、頑張ってやらせている部分としてといるのですが、これは私自身は全然やっていなくて、教員達がやっていることなんですけれども、こんなことをやらせているんですね。これは、特進コースの1年生を担当している教員が、1年生の数学の授業を始めるにあたって、配っているもので、3回直しノート以外のものも書かれています。それほど不思議なものでも何でもないのですが、少しはご参考になるかもしれません。

試験の3回直しノートについてなんていう説明がありますね。これは、試験をやりっ放しにしないようにとすることを目的にした家庭学習、復習の分ですね。組織的な復習のさせ方の1つの例なのだろうと思います。テストなどで間違えた後、その右上のところに書いてあります。やり方がね。

①間違えた問題の解説を写す：解説を写すだけではなくて、多分問題なんかそのまま写させたりしている場面が多いですかね。ノートを見て、どういう問題なのかわからないですから、私も、問題は自分でまずノートに写しなさいということは、よく言いますね。

②何故間違えたのか自分なりに分析してみる。

③その上で自分で解き直すと、そこから離れてまた、別に解いてみる。

④答え合わせをしてここで、間違えたらまた1からやり直す。

という③、④の事を2度繰り返す。そして、この問題に関する感想を書くという事で、実は生徒に配っている資料は裏表で次にも続く部分もあるのですが、それほどではないので、この生徒の手書きのノートをよく見ますと、正解答とか、自分の答えとか間違えた理由とか、解き直しかそんなような文字がみえますので、数学の先生方は、ご覧になればわかるかと思いますが。数学の別の教員もいますので、先生方もし、何か聞きたい事がありましたら聞いてあげてください。お願いします。

これが日常的な復習の一つの形ですね。それとあと、授業の展開でプリントの学習をメインに教えている教員もいます。もちろん彼もそうなんですけど、この時も、プリントをその時の授業用に1枚用意してあげて、家庭学習用に多少多めに問題を残しておいて、家ではこの分をやるんだというような事を、常に出していくというようなことをしたりということもあるようです。

数学合宿

その他、モチベーションを高めるという意味でやっているのが、教科別の合宿です。これは、本校に、研修施設があるものですから、そこで、数学だけ・国語だけ・英語だけという形での一泊二日の合宿なんかをやっています。これもついこの間やったものの時間割ですね。それと感想を1つづつ書いていました。

この中でのやり方なのですが、講座だけ中心になると、どうも生徒のモチベーション下がるようですね。課題のプリントを何種類も何枚も用意しておいて、とにかくできた

ら次からあるなみたいな、そういう形でこの時やっています。それは確かに良さそうですね。最初、何問か入試問題の代表的な部分、いわゆる難しめのもの、これを解説してあげて、その後はもう、どんどん自分でやっていきなさい。数学の教員が数人そこで待機していて、わからなくなってくると、ちよっと質問に来ると。質問にだけ答える、あと、答えを出したと言う場合も答えのチェックですね。かなり、自分勝手な答えの出方っていうのか、本来間違っているのに、という場合もありますから、一応それなんかを見てあげる、というような手助けの仕方です。よかったです。またその、用意したプリントにも、教員も色々工夫するんです。

これ眠くなるわけですよ。だいたい講義が8時で11時以降から問題を始めて、1時位までですかね、やっていますけれども。だんだん頭が働かなくなるわけですよ。その時、うまい工夫だなと思ったのは、最初に配る問題の方を難しめにしておくんです。後の方が実は比較的易しいめにしておく。これは普通逆ですよ。易しい問題から発展させていって、難しい問題ってつい私なんかは考えていたんだけど。でも、そういう工夫をしていて、これはなかなかいいやと思いました。確かに、まだ疲れが無くて頭が

充分働く時に、思考力を要するやつをやらせておくんですね。そのうちだんだん易しくなっているという事は、そんな生徒は理解していませんから、何か自分の力で解け始めたという気がするわけです。達成感を味わわせるという実に微妙な手ですけれども、これ、いいんじゃないですかね。是非使ってみられたらいいと思います。

で、感想にもありましたけれども、「こんなに勉強した事ないけども、苦じゃなかったし、むしろとても楽しかった」というような感想が書かれています。また、「センタールレベルの問題も高一の知識だけで解けてしまうんだという事にも驚いた」という事で、1年生対象の合宿だったのですが、こういう意味で、モチベーションを高めた部分では成功だったんだろうと思います。こういうったものっていうのはあくまで、モチベーション高めるといのが第一ですよ。実力をつけるっていうそこまでは、一泊位で何ともなる訳がないので。そういう事を、断続的に所々入れておくことで、気持ちの張りを作っていくという事に役に立つだろうと思います。

※数学科の取り組みについて講演いただいた塚川岳彦先生は東京理科大学数学教育研究所主宰の第2回「数学・授業の達人」に「生徒の誤答案から学ぶ」のタイトルで「相加平均と相乗平均の関係」の単元について応募され、最優秀賞を受賞されました。

(5) 学校評価

学校評価

本年度から、文科省から各学校、「学校評価というものを導入せい」と、完全な実施では私立はありませんけれども、一応努力義務としては、あったわけです。ただ、6年前から始まった、そしてまた特にこの3〜4年、私が教頭になって始めた部分というのは、実はこの学校評価でやっていることをもうちょっと早めにやっていたぐらいな、私は、意識なんです。ですから、おかみのお墨付きがついて、大いに結構だという感じなんです。ですから、この学校評価というのを、文科省が言うからいやいや……というのではなくて、むしろこれを積極的に私自身はこの学校で活かすべきだという風に考えています。

これは評議委員会、（言ってみれば学校関係者の集まりですね。各私学の理事会であるとか、色々あるかと思いますが、本校では、評議委員会というのがありますけれども。）に提出した簡単なまとめです。理事会向けの計画としては、もつと何ページにもなるものを用意してあったのですが、あまりページ数の多いものを見せても仕方がないと思い一枚にまとめてあります。書かれている事は、そんなに新しい事はないです。

学校の中に委員会作り、自己評価委員会、学校関係者の評価委員会：第三者としてつきあいのある大学の学長先生にこれをお願いしている部分もありますが、まだ、今年度はそこまで辿り着いていないのですけれども、そのような委員会組織を取り入れました。私が教頭という立場で非常に生意気に聞こえるかもしれませんが、この制度に期待する部分は、理事会にしつかり動いてもらいたいという事ですね。やはり理事会に上手くリーダーシップをとってもらわなければならないと、学校っていうのはなかなかうまくまわらないと、私学の場合特に思うんですね。直接的な部分は校長・教頭に任せるよという形になっているんですけども、なかなかやはり、学校の将来的な展望までかけて、そういうものがしつかりしていないと、我々もちよつと動きようがないから

ということ、これは、こちらの方から、管理職の方から逆に「理事会こういうことちやんとやらなきや駄目でしょ」と言う形でもって、委員会を作ってもらったという経緯ではあります。これは今やり始めて、手探り状態です。学校関係者の評価の仕方だとかそういう事もはっきりと決まっているわけではないです。でも手探りで少しづつ形を整えているということ、です。

分掌活動報告会

これよりも先立ってやっていた部分で、分掌の活動報告会というのをやっていたわけですね。これが3年経ちました。実は昨日、今年の報告会というのが行われたのですけれども、それが、どういうものかといいますと、年度の初めに各分掌に今年度の活動計画、これを立てさせる、それを全体の場で発表させる。2学期制をとったものですから、前期・後期のその間のところ、そのところで中間発表をさせる。年度末のところ、その年度の活動のまとめをさせると、そういうものだったんですね。

全体共有の場をつくる

時間は、私どもには、5つの部、教務部・進路指導部・生徒部・環境管理部・募集広報部、なんていう部があるんですね。この辺はもう、学校によってまちまちだと思います。あと、委員会として宗教委員会・国際交流委員会なんていうのが、8つあるわけです。その5つの部と8つの委員会に発表させていくという形なんです。時間は、もう、短いです。部でもって、1つの部で10分、委員会は5分だけ。だから、ここでもって、何か喧々諤々、議論して何かしようとかそういうものではないんです。ですから、やり始めた当初は、教員の方からは、「また仕事増やしやがって、大谷は」という「こんなことやって、何になるんだよ」という類の反応があるのは、はっきりした声ではありませんけれども、視線は充分感じていましたね。でも、私どもの学校にはこれが必要だという風に踏んで、強引にやっていたという部分があります。たかがトータルで90分位の会議時間ですけれど、こういうのを日程の中に組む事でも結構難しいんですよ。

そういうの、経験されていませんか？でも、それはとにかく何とかやろうということ、頑張って3年間やってたんですが。

「自己評価」がもたらす効果

今、見ていただいているのは、保健安全委員会というものの下敷きですね。本当はここに目標であるとか、色々書いてあるんです。昨日のところまで達成率何パーセントだとか5段階評価でABCなど、こんなものをつけさせる。これはもう、あくまでも自己評価ですので、各委員会の話し合いの中できめていくということです。そして、これを発表して、成績が悪ければ、管理職が「なんでお前はできていないんだ」ってそんな怒る時間ありません。そんな場でもない。あくまでも自己評価です。ただ、それだけなんですけど、やはり教員も真面目なんです。自分の委員会でも目標を立てて、充分に出来ていないというのが、こういう風に見えてはつきりしてくると、そうすると、翌年にはそこを何とかしようとなってくるわけです。ですから、この分掌の活動報告会、

年に3回あるんですね。最初の計画発表・中間発表・そして最後ですけども。これはごく小さやかな会議3回だけなんですけれども、しかし重要な位置づけをもっているなどという風に私は思っています。

それで、この学校評価の一つの枠の中でこれを扱うように今なってきましたから、それで形も整ってきたと思っています。去年、一昨年は、各部・委員会勝手なフォームでやっていました。今は、分掌ごとの項目見ておりますね。見ていただくと、今年度の成果目標、今年度の行動目標というような事、これはもう各部・委員会で自由に作っています。あと、これを学校評価の中での、位置づけというのを我々は持っているわけで、学校評価としての項目ですね。これは要するに管理職側から、この委員会はこういうことに関して、関心を持っていくという意味では指示であるのかもしれないけれども、これに関しての評価をしていきなさいということですね。昨日それが行われて、ようやく本当に形が整ったかなという事で、教員達の発表の仕方もだいぶんなれてきて、そんな大きな抵抗もなく、必要な質問があればその時はして、出された質問に対して、また各委員会ですべていくんだと思うんですけども。少し流れが出てきたと思って喜んでいきます。

これが、今、分掌という形で5つの部、それと8つの委員会なわけですけれども、教科毎、それとあと、学年、コースにもやはり、今後は広げて行きたいなと思っっているんですね。各教科でも当然、年度の目標を立てますよね。これは極簡単なフォームで、一度コンピュータに入れておけば、ちよつと手直しするだけなものですから。こういうものは一度やっつてしまえば、最初、導入のところではちよつと抵抗あるかもしれませんが、やっつてしまえばかえって楽なんですよ。去年こうだったっていうのは、すぐコンピュータから取り出して見て、じゃあ今年はこうしようっていう、すぐに発展的な話につながっていくので、これを来年度以降、うまく教科や学年の中にも持っていけないかなという風には思っています。

学校満足度アンケートの実施

それと、今年、授業満足度アンケート、学校評価にかかるものとして、アンケートをやりました。それに関する資料はつけてありません。その結果見てだいぶショック受け

たものですから。あまり外部の方に見せるのは、ちよつと僕もためらわれるという…。まずい時にアンケートやったんです。高校3年生の生徒指導上の問題が発生して、その対応についてですね、生徒に対する教員の対応について、だいぶ生徒の方が反発を持つてしまいました、ちよつと喧々譁々するような場面があった時期だったんですよ。

ちよつどそんな事でガタガタしていて、その時にこういうアンケートどうなの？と正直、チラリと迷いました。ただ、そんな事でオタオタしてはいけないなど、そこでわるい結果が出たとしてもそれはそれで受け止めてやればいいと、そういう風には思っ、出たらやつぱりガックリしたんですけど。ちゃんと出ますね。資料を持って説明できないので、アレなんですけども。本当に学校のまだ不十分だった部分とかいうのも、出てきますね。生徒の声と保護者の声と随分違いがあります。あと、教員の反応というのもやはり、違うんだと。教員が自分の学校について思っていたイメージと、生徒、保護者が自分の学校について思っていたイメージというのは随分違う。これに気がつくだけでも、これはなかなかいいんじゃないかと思えますよ。ですから、踏み出してみても良かったかなと思います。ただ、問題はやってしまった後の対応ですよ。何でもね、このア

ンケートという形で保護者からも意見を聞いてしまった以上、何らか改善しないといけませんもんね。多少その辺は腹くくっておかないと。そういう意味でも理事会にもしっかりやってもらいたいですけどね。口で最後は終わってしまったようなものですけど、ざっと私がお話をしようかと思った事は以上でございます。

(了)

事例に学ぶ 授業改善に向けた

チームづくりとそのステップ

-授業評価の科学③-

2010年11月19日 第一版第一刷発行

編集・発行 株式会社ヒューマン・リンク

〒604-8141 京都市中京区蛸薬師通

東洞院東入る泉正寺町328 西川ビル3階

Tel 075-212-7015 Fax 075-212-7016

<http://www.humanlink.info>

©Human Link 2010 all rights reserved

※無断転載、複製を禁じます